



説教要旨 「神の愚かさに生きる」

コリントの信徒への手紙Ⅰ 1章18～25節

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」 殺されることがわかっていながら十字架へと歩んで行かれたイエス・キリスト。なぜわざわざ殺されにエルサレムへ行ったのか。その姿は、この世の価値観で言えば愚かなことでしょう。しかし教会は、このイエス・キリストを、神の子であり、私たちの救い主だと宣べ伝えています。十字架につけられたキリストは、「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」(23節)であることをパウロは見つめ、宣教の言葉が人々に愚かに聞こえることを認めています。そうであっても、犯罪者として十字架につけられて殺されたイエスを、救い主だと信じ、宣べ伝える、それが教会の宣教です。

救い主が私の罪のために死んでくださった。あなたの罪を背負って十字架にかかれた。この十字架の言葉を受け入れることは、本当は自分こそが、十字架につけられなければならない罪人であると認めることです。自分が罪人であるなどと、誰もそんなことを認めたくはないでしょう。むしろ、自分がより知恵ある者となり、正しい者になることによって救いを得る、という方がずっと好ましいことに思えるのです。しかし、それは聖書の教えではありません。聖書は、私たちが愚かさから抜け出して少しずつ知恵を身につけ、より高く立派な者になっていくことで救いを得ることができる、とは言っていないのです。そうではなくて、私たちは十字架につけられて死ななければならない罪人であり、自分の力で救いを得ることはできないのだ、と言っているのです。そして、その私たちの、自分ではどうすることもできない罪を、神様の独り子イエス・キリストが全て担って十字架にかかって死んで下さった、そこに神様による赦しの恵み、救いがある、と教えているのです。それが教会の宣教の言葉なのです。

こんな愚かな私のために、神はその独り子を十字架にかけられた。そう信じる者とされたなら、十字架の言葉はもはや愚かなものではなく、私たちを本当に救い、恵みの下に生かす神の愛となるのです。

(2020・6・7 説教者：稲垣真実)